

先覚者の命運—碧海阿部甚十郎の場合

森 仁史

なにごとによらず、時代に先駆ける人物や行動があるものだが、それによって世俗的な成功を収めることができず、悲運に見舞われることが多い。碧海阿部甚十郎敬忠（一八四一—一九一〇）もそうした一人である。筆者がこの人物を初めて知ったのは『温知図録』に収められた図版とそれに照応した作品『色絵金彩海龍図遊環花瓶』（石川県立美術館蔵）によってだった。

阿部は明治維新以降に陶磁器制作に関わり名を成したのだが、この作品以外には余り語られることも少ないように思う。金沢美術工芸大学に寄贈された資料を金沢市立玉川図書館近世資料館に依頼して、整理を進めることができたので、これを手がかりに彼の生涯を紹介してみたい（同館作製『阿部甚十郎旧蔵史料目録』平成二十三年参照）。

阿部甚十郎は阿部家十一代当主であり、この阿部家は譜代大名阿部氏一族の八右衛門が徳川家康に仕えた時に始まっている。これを継いだ甚右衛門から前田家に仕えるようになった。代々御馬廻組、御作事奉行などを務

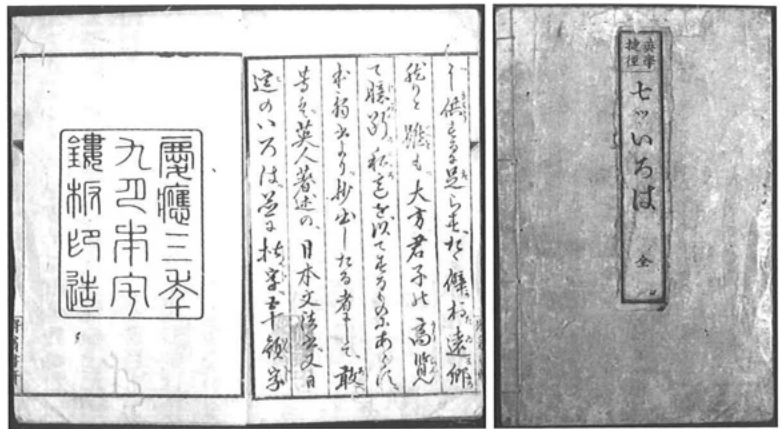


1 阿部甚十郎ポトレート  
1864年か

める家柄であった。また、時に京都、江戸詰めを命じられることもあった。甚十郎が元治元年（一八六四）十二月末期養子として阿部家を継いだとき、禄高は千五百石であった。同二年六月、阿部

は壮猶館の砲術稽古方指引に任ぜられたが、「内存申上候二付、砲術等為修行」長崎での修学を命ぜられ、十一月十六日に出発した。阿部の残した資料には幕末明治初期の貴重な写真が含まれていて、この新しいメディアに阿部が大きな関心を寄せていたように感じられる。長崎行に際して撮影したと思われる阿部のポトレート（図1）が残され、向学に燃える満二十三歳の面構えを彷彿とさせている。ただ、後に触れるように、画面を見ると阿部がさほど頑健な体軀とは感じられない。この頃、長崎には幕府の設置した英語伝習所のほか、佐賀藩が設置した蕃学稽古所（後、致遠館）が開設されていた。阿部は「西肥長崎執行人交名並雜記」と題したメモを残していて、これによれば、加賀藩から航海術修行に二十二名が派遣され、阿部と岡田秀之助が「内存」ゆえに追加派遣されたようだ。このなかの近藤五郎が慶応二年（一八六六）九月に薩摩島津家臣を殺害し切腹する事件が起ったが、これに際し「御外辺懸合方等始終行届」いた調停役を務めた。この少し後に、阿部は「英学捷徑七ツいろは」（慶応三年、巴齊園）（図2）を刊行している。すでに文久二年（一八六二）には、堀達之助によって『英和对訳袖珍辞書』が翻訳刊行されており、阿部の書名はジョン万次郎が一八五九年に刊行した『英米対話捷徑』を手本にしていたのかもしれない。石川県立歴史博物館所蔵の原本を見ることができたので、詳しく紹介したい。

この当時としては当然のことながら、一般的な木版刷り、袋とじ製本と言う造本形式で作製されている。現在でも、英文と和文を同一の本に収録しようとする、ページ組は縦横を分けて、開きを反対方向にするくらいしか解決方法がない。阿部の採用した方法はなかなかユニークで、製本は左綴じとし、和文本文を縦書きで左から始める形式をとっている。（図3）自序において、「英人著述の、日本文法書、又日本辞書より抄出したる者にして、敢て臆断私意を以てするものにあらす」と断っている。彼が学習に用いた参考書を編集したものに違いない。であるにしても、英語を学び始めて二年ばかりの間にこのようなガイドブックを執筆するの



2・3 『英学捷徑七ツいろは』(1867年)と自序・本文

これらの表記文字の種類を指しているのであろう。なお、阿部はこの刊本で、自序では阿部為任、奥付では碧海阿部友之進と名乗っている。明治三年作製の公文書では、阿部甚十郎藤原敬忠としているので、他の名乗りは自らが命名したものであろうか。

また、阿部の手元には「肥前之男子」と墨書された鶏卵紙プリントが残され、ここには前記致遠館の教頭格だった副島次郎(種臣)、大隈八郎(重信)と語学教育の中心だった小出千之助らが並んでいる。この写真は慶応三年の撮影とされ、同館には勝海舟の子ら藩外からの留学生も多く、一

は並外れたことではないだろうか。本文では、活字体、筆記体のアルファベット大文字、小文字、いろは(カタカナ、ひらがな、漢字)の英文表記と五十音の英文表記が枠内に一文字ずつ印刷されている。題名の七つは

出帆するのは十二月末なので、先の辞書編集に励んでいたのかもしれない。明くる慶応三年一月六日に所口(現七尾市)に到着している。阿部は四月にこの所口奉行を命ぜられた。時に満二十六歳であった。六月二十八日(陽暦八月七日)パークス公使に率いられたイギリス軍艦バジリスク号、サラミス号、サーベント号が七尾湾に到来した。新潟に替わる開港候補地を探すため、水路を測量していたのだった。ここに二十四歳の若き外交書記官アーネスト・サトウが乗船していた。彼の回想「一外交官の見た明治維新」によると、「当時の七尾は人口八千ないし九千を擁し、別名を所ノ口と言った。加賀の大名の汽船数艘が出入りしている重要な港で、阿部ジュンジローという町奉行が支配していた。阿部は長崎へも行ったことがあり、幾らか英語を知っている青年だった」と記されている。

このとき、阿部が彼らから贈られたと思われる写真が残されている。「The Governor of Nanao」 With Mr. Suttons Implements」とインクで献辞が



4 大阪城本丸大広間前 1867年

時は百人ほどが在学したと言われるから、阿部もここに学んだ可能性がある。あるいは、阿部が鍋島家中の志士たちに何か印象を残す特別な存在だったのだろうか。また、これ以外に大隈の名刺写真が二枚残されているが、阿部の所持していたなかでは、同一人物のポートレートが三枚ある人物は他にはいない。

殺害事件の頃、阿部は体調を崩し、ほぼ二年の就学を切りあげ帰国と決まるのだが、どういふわけか実際に長崎を

書かれた洋紙に包まれた六枚のキャビネサイズの鶏卵紙プリントである。一八六七年五月撮影と記された四天王寺五重塔・生玉弁天池・大阪城榎櫓・大阪城本丸大広間前〔図4〕と一八六七年撮影と記された大阪城桜門・安治川河岸である。とくに大阪城内の写真はこれまででは見つかっていない。サットンが七尾に入港した船に乗っていたかどうかは明らかではないが、もしかしたら同年代のサトウが阿部の格別の配慮に感謝して贈ったのではないだろうか。

乗組員のうちミッドフォードとサトウはパークスの指示を受け、陸路で七尾から大阪に向かうルートを検分することになり、奉行の阿部と交渉し、加賀藩の了解を取り付けることに成功する。サトウらは八月十一日に前田家差し向けの槍持ち二十名の隊列に伴われて、志雄、津幡、森本を経て金沢に入った。ここで里見亥三郎らと十三日まで七尾を開港地とした場合、イギリスとの交易や港の支配について想定される諸問題を検討した。交渉にあたった藩役人はサトウがジャパン・タイムズに寄稿した論文をまとめ「英国集論」を読んでいたから、藩内にそれなりに英語を解する者が在動していたと思われる。日本の内政問題に触れたときには、藩役人は幕藩体制を支持（というよりは前田家護持）していたが、サトウも書き残しているように、加賀は「日本中でも無知と非文明の本場」とされていたから、次に訪れた福井ではビールやシャンパンが振舞われるほど「文化や資源がすぐれている」とことと比較すれば無理からぬところだったろう。

阿部は慶応三年（一八六七）十一月には統隊御馬廻御使役を命ぜられ、役料百石を与えられた。この役職ならば当然維新の動乱に出陣することになり、明治元年一月幕軍に従うべく京阪に出兵を命ぜられたが、動橋で引き返す命を受けた。閏四月には反対に越後へ官軍に従う命令を受け、二十四日に出発し、五月頸城郡赤田、六月三島郡久田と転戦したが、胸痛、吐血に難渋したようである。七月八日交替の命を受け、八月十七日帰郷した。従って、もつとも激しかった長岡争奪戦には参加していないようである。明治二年一月十五日、北越出兵の十一名が御丸御台所で食餐に招かれた

のが前田家臣としての最後の時となり、三月二十九日には「役儀御免」となった。この年のうちに、阿部は古寺町の邸内に十坪余りの窯室を築き、大小五つの絵付け釜を設けた。同時に、内海吉蔵らの画工と生徒総勢五十名余りを雇い、「業場」を創設した。

阿部はこうした製陶業に転身した理由を次のように記している。

碧海儀赤絵焼陶器製造業ニ着手スル主意タルヤ本県山代村九谷陶場ヲ首トシ、金沢ニ製スル赤絵陶器ハ県下固有ノ名産ニシテ、其声価世人ノ知ル処ナレ共、製態ノ粗悪ニ流ル、ノ故カ、盛隆ヲ期スルノ時ヲ見ス；つまり、阿部は当初に赤絵に着目したのであり、その復興を目指したのであった。確かに、冒頭に掲げた作品は絵付モチーフこそ龍なのだが、基調は赤絵付けにあるとされている（図5）。ところが、明治十六年阿部が上京したときには、「時勢ノ変遷人心ニ影響ヲ及ホシ、先年大二嗜好セシ物品ハ稍ヤ需用ヲ減シ、唯古九谷風ニ考案ヲナシタル製品ハ意外ニ世人ノ嗜好スル処トナリ」という変化を感じざるを得なかった。阿部の陶磁器制作への思い込みの強い側面が伺えるように思う。

話が先回りしてしまったが、窯を築いた翌年、明治三年二千円余りの製品を携えて、神戸、長崎に赴いたが、四百円余りの損失となった。このことから、阿部の制作が当初から海外輸出を前提としていたことが分



5 《色絵金彩海龍図遊環花瓶》（石川県立美術館蔵）と「温知図録」中の図版



6 集合写真（前列中央に阿部）1970年

山松三郎のスタジオを訪れたものと思われる。

阿部は自らの失敗の原因を素地の品質にあると考え、肥前三川内から見本となる素地を取り寄せ、能美郡若杉、小野、徳山などの陶工に貸与し、西洋食器制作を依頼したが、始めは不満足なものもやむなく買い入れていたが、ようやく明治四年頃に満足できる素地を得られるようになった。この年には石川県からの委嘱を受け、ウィーン万博出品向けに三百五十円余りの製品を納入した。明治六年一月山口県土族津川良蔵から、彼が請け負ったアメリカ向け輸出製品の発注を受け、毎月八百円の製品を広島融通会社大阪支店に発送するよう依頼され、着手した。この年六月宮内省から珈琲茶碗、酒器（四十五円五十銭）の発注を受け、感激した阿部は納入に際して高さ二尺六寸の花瓶を献上した。翌年九月五千円余りの製品を大阪に搬入したが、津川と融通会社との間に紛議が持ち上がり、製品は納入を拒否されてしまう。やむなく阿部は製品を長崎に運び、三千円余りで販売する羽目に陥った。この時も、阿部は京都で二枚のポर्टレート（湿版写



7 阿部甚十郎ポर्टレート 1874年

かる。また、この年に上京もしていたらしく、「Taken by Mr. Yokoyama in 1870. or 3rd year of Meiji. Tokyo」と裏面にインクの書き込みのある鶏卵紙プリント（図6）が残されており、横

真（図7）を撮影しているが、幾分気落ちしているように思えるのは気のせいだろうか。

こうして、多大な損害を蒙った阿部はこの年の内に窠を閉じ、家屋を売却せざるを得なくなる。阿部はこのときの負債を二万円と記している。だが、陶磁器改良に熱意は失わず、明治八年金沢に売店を開いた。明治十年内国勸業博覧会出品には珈琲茶碗他を出品し鳳紋賞牌を受け、翌十一年パリ万博には花瓶、香炉、巻煙草差、珈琲具、肉皿、菓子器、コップなど九百円余り出品し銀牌を受けた。殆ど売約となったのに、暴風のため総ての製品が破損するという悲運に見舞われた。

明治十二年飛鳥井清の請願により石川県から磁器生産振興のため二千五百円の助成金が決まったときに、阿部から石川県勸業課長にあてた嘆願書が残されているが、この資金は飛鳥井の九谷陶器会社に振り当てられ、阿部はこれには参与していない。翌十三年から阿部は石川県勸業課製陶図考案掛となつていくが、これは売店も維持できなくなったためではないかと思われる。だが、阿部の手でこの年六月二十四日に陶磁会社仮同盟条書が作成されているので、再起を図ろうとしていたのだろう。この会社は実現せず、この後は行政の博覧会部門で指導や審査に当たることになる。明治十四年第二回内国勸業博覧会には三ツ物花瓶、香炉、人形などを出品し、有効二等牌を受けた。この年四月に石川県に七千円の貸付金を嘆願しているので、出品の榮譽とはうらはらに財政状態は苦しかったと思われる。十五年には宮内省から再び花瓶の注文を受け、松原新助（陶工）、松本佐平（画工）を指揮し、納品した。十八年五品共進会には石川県の出品準備から携わり、審査官として上京した。この時、農商務省から功労金三十円が授与された。明治二十年には石川県からも功労賞二円が授与された。この年一月開校の金沢区工業学校校長として納富介次郎が来沢したので、当然のことながら阿部は頻繁に納富や岩村知事らと会い、美術振興に熱い思いを語り合ったようで、この時期の日記「毎日雑記」が残っている。明治二十年一月十八日の条には「新古美術会設置之相談弥纏」という記述もみえ

る。二十三年第三回内国勸業博覧会には花生など四十五点を出品し、有効三等牌を受けた。二十一年から勸業博物館で図案考案にあたるようになっていたが、二十三年には石川県備勸業課付属博物館専務として月給十円を給与されていた。この時期が実業では一敗地にまみれたといえども、自らが掲げた理想の実現に邁進できた充実した日々だったろう。

しかし、ジャポニスムの退潮とともに、陶磁器製造の主流は阿部の守備範囲を超えていく。明治三十年三月阿部は金沢区裁判所森本出張所臨時雇いとして採用されている。日給十八銭であった。この職は三十五年十二月六十一歳で退くのだが、裁判所職員一同から茶器一組が「惜別ノ駿迄ニ送呈」されている。よほど阿部の人柄が愛されたようだ。阿部は明治四十三年（一九一〇）六十九歳で金沢に没した。明治四十一年五月に新古美術博覧会看守を務めているので、晩年まで美術にかかわり続けた生涯だった。彼の死後、少なくとも戦前の産業界では阿部の名が全く忘れ去られたわけではない。

昭和十一年（一九三六）金沢で商工祭が計画され、三日間にわたり仮装行列、芸妓手踊り、モデル撮影会、花祭りなどが市内を賑わせた。初日の四月十八日尾山神社で先覚者慰霊祭が行われ、二十日に東別院で大谷光暢法主が追悼法要を催した。ここには清水誠・長谷川準也・圓中孫平・阿部碧海・津田米次郎・横山隆興・納富介次郎・越野佐助・亀田伊右衛門・水登勇次郎・本田政正・横山隆俊・辰村米吉・市村孫太郎の十四名の先覚者として祀られた。この人選は金沢文化協会評議員だった八田健一、松本佐太郎の選考によるもので、「金沢産業功労者略伝」と題されたパンフレットも発行され、阿部家に伝えられている。おそらく遺族としてこの式典に参列したと思われる。松本はのちに『定本九谷』（寶雲舎、昭和十五年）を編集することになるこの地方の陶磁史研究の第一人者であり、明治の先人の労苦をつぶさに知るがゆえに、この顕彰に必ずしも有終を飾るに及ばなかった圓中や納富を挙げたのだと思われる。戦後の陶磁器界の趨勢からすると、まさに隔世の感を禁じえないところである。

## 雪岱デザイン

小村雪岱の本を作っている。

雪岱の本を作りたいと思ったのがいつ頃からだったのか、にわかに思い出すことはできない。だが、汚い鏡花本（羽二重装）を手に入れたり、何の変哲もなさそうな『多情仏心』二冊を五百円くらいでもとめたり、水上滝太郎の『月光集』が千円くらいであり（もちろん、函無し）、手に取ると雲母摺の版画表紙で、みごとに書籍に仕立てられているのに感服したりと、けっこう長い間それをあたたためていたらしい。それを実現させようと考えたのは、二つのことがあったからだ。

その一つは、だいぶ前に、『版画藝術』の秋田真波さんが突然、「山田さん、雪岱、書けますよね」と電話をくれたことだ。雪岱について書くということは、その時は思ってもいないことだったので、不意打ちのようなものだった。なぜ、突然の指名だったのか。時間もなかったことだから、誰かに断られたのかもしれない。だけれども、秋田さんの指名にはそんな気配は少しもなかった。そして、なぜかその時に、書いてもいいなと思ったのは、そんな本たちの蓄積があったからかもしれない。それと、秋田さんの愚痴とも言える「雪岱」についての、考えを聞いてしまったからだ。

秋田さんは電話先で、やるよと言う返事を聞いてから、雪岱にかかわる問題をいくつも持ち出した。現在、雪岱画集の編集をしているのだが、後版の特定がむずかしい事。あきらかに後版なのだが、画集には入れざるを得ないこと。秋田さんは、けっこう版画のオリジナルにこだわっていたから、そんな事態があるのは不愉快でしかたがないのだろう。さらに、信頼に足る研究的年譜のないこと等等、画集の途上で出てきた疑問をわたし

山田 俊幸

# 一寸

第五十二号 二〇二二年十一月

新・旧案内52

本多錦吉郎と陸軍の地図・画学・図学教科書

青木 茂

## 第五十二号目次

### 新・旧案内52

本多錦吉郎と陸軍の地図・画学・図学教科書

青木 茂 1

この夏秋、あるいは和田英作の装幀活動若干

岩切信一郎 12

時に抗いし者たち——私の小菩薩峠(8)

大谷 芳久 18

近代日本画の構図決定格子(一四)

金子 一夫 48

——狩野正信・元信(二)

心華雜録(一)

丹尾 安典 52

銅版画と浮世絵版画 江漢の場合

森 登 58

銅・石版画遺聞47

先覚者の命運——碧海阿部甚十郎の場合

森 仁史 63

雪岱デザイン

山田 俊幸 67

『一寸』第四十九号〜第五十二号 目次

70

執筆者別目次 第四十九号〜第五十二号

71

■本多錦吉郎のことを最初に執り上げたのは雑誌『日本美術界』二巻三号(大正九年三月)の本多錦吉郎号である(図1)。この雑誌はとも併人と思われる花笠庵翠葉こと石倉重繼なる人物が、鍾美閣という名で新画の展覧会を開き、それとは言わないが売り、それとは言わないが宣伝用に発行したのが『日本美術界』らしい(創刊号は大正八年七月二十五日発行)。賛助員の名簿を見ると文展系の日本画家を除いて大家画伯が名をつらねていて、大谷・丹尾同人が好意を寄せている山口八九子も「戸棚より蟹の出づ梅雨の漁家に居る」の句を肥前から寄せている。

創刊号は旧菊判三十二ページだが、そこに口絵と礼賛文「登山」を寄せた丸山晚霞、印譜を載せた小川芋銭の二人が彰技堂の門下生で本多を敬慕しているところから特集号を組むことになったらしい。現存個人の特集など珍しい時代の突出した編集といえる内容は、全百十二ページのうち百二ページが特集で、そのほぼ半ばは四十八ページが横山健堂の「油画の開拓者本多錦吉郎翁」でよく調べ熱を入れて書いている。あとは多くは門下生、晚霞、芋銭を始め河合新蔵、三宅克己、岡精一、中村鈴子らの彰技堂を回想し師を敬愛する文辞である。これの多くは前年大正八年十一月二十三日の本多の古稀祝賀会での説話や懐旧談を元に編集されたようである。ところで鏡城・村居鏡次郎は明治十二年十月頃(実は十三年二、三月頃の入門者として彰技堂門人帖にある小林鉄次郎は忠左衛門二男とあり、これが鏡城である)から彰技堂に通ったが生来、たで努力はしてみたがものにならず、この口の悪い十三、四の小僧は日高文子や塚原律子らに鉄拳制裁を喰